



- 体育会名:関西学院大学体育会柔道部
- 創部年:1910年(明治43年)
- 2025年度会員数:16人(4年3人、3年4人、2年2人、1年7人)

- 同窓倶楽部名:関西学院大学体育会柔道部同窓倶楽部
* 関西学院同窓会 公認団体

- 同窓倶楽部通称:新月会
 - 設立年:1981年(昭和56年)
 - 会員数:780人(男性754人、女性26人)
* 物故者含む

上ヶ原篇(戦前)

高専柔道大会は1914(大正3)年、京大主催で第1回大会が始まり、26年には全国を東部、西部、中部と3地区にわけ、それぞれの優勝校が京都武徳殿で全国一をかけて戦った。29年に第16回大会を迎え、私学の参加を承認した。関学高商柔道部は中部戦に出場し、2回戦で八高と戦い、大将戦で敗れた。

30年には、作詞山田藤男(3年)、宝塚歌劇団の高木和夫先生作曲による部歌ができた。この年は中部戦決勝まで進んだが、松山高に大敗している。この年のメンバーには31年卒業の木村虎一第4代新月会会長の名前がある。31年は中部戦決勝で同じ松山高に負けたが、永岡三治初段、大将青木貞雄三段の活躍で1人残しの僅差であった。以降、34年まで中部戦で優勝することができなかった。

35年7月20日、同志社と中部戦決勝を戦い、1人残しで初めて中部戦優勝。柔道部80年史には「思えば大会参加以来、悲憤の涙を武徳殿上に流せしこと6度この重なる怨念を晴らさんと血涙の猛練習に不敗の戦力を鍛えたり、今ここに宿願の中部優勝の夢を果せば、弦月漸く光彩を放つ、この喜び、この感激を何に託して語らん、涙溢れ声つまり語るに言葉なし」と、その喜びが語られている。

7月22日の全国優勝戦では山口高商に2人残しで優勝。関学が大会に参加して7年目の快挙であり、専門学校としては初めての優勝である。80年史には優勝旗を掲げて、隊列を組み部歌を高唱し行進する様子が生き生きと語られている。

36年は同志社に、37年は六高に敗退。38年は7月3日、5日の大雨による神戸大水害

の年で、柔道部長馬淵先生(第3代、20年～45年)宅も被害を受けた。試合前の大切な調整時期であったが、部員一同救助活動に赴き、毎日の泥水かき出しに奮闘した。7月15日、中部戦では、小溝輝夫二段、千葉真治郎二段、伊藤安吾三段、塚田長和三段らの活躍により同志社に勝ち、優勝。全国優勝戦でも拓大予科に6人残りで優勝している。翌39年も野口泰三三段(第5代新月会会長)、与三手清士三段らの活躍により、全国2連覇を達成している。40年は日中戦争も激しくなり、全国高専大会は中止となった。

上ヶ原篇(戦後)

学生柔道は45年8月の終戦後から禁止された。柔道部はレスリング部に改部され、柔道場はマット張りのレスリング部練習場が変わっていた。49年、柔道経験者達が集って同好会を結成し、部長を当時相撲部長であった玉林憲義先生(第4代部長、51年～56年)にお願いした。50年には、運動総部(現体育会)の柔道倶楽部として承認された。当時の部員には、主将米沢、主務村田、入江、望月、小室、中井(旧姓岡本)、中西、石谷、萩原、萩原、三宅(逸)、臼谷、田中(旧姓村上)、北野(旧姓大川)らがいた。

51年、主将村田恒雄(第7代新月会会長)、主務小室二郎で柔道部がスタートした。関西学生柔道連盟を創設した村田が初代幹事長に就任して6月17日、第1回関西学生柔道大会が大阪城内大阪管区警察学校道場で開催され、関学は惜しくも第3位に甘んじた。

52年は戦後復活3代目の年代として主将岡本重一(中井)、主務中西康明で出発した。師範は未定だったが大学院に残った米澤明(第6代部長、66年～95年)、寺島秀雄、材井留吉の従兄弟で武専出の材井又一先生、萩原稔の叔父の八段萩原広雄先生らが指導に来られた。第5代部長に前田正治先生が就任されている(56年～67年)。

64年には大阪府警の河野雅英先生(第6代、64年～95年)を師範として迎えた。主将は奥野衛(卒業後兵庫県警、第7代師範93年～2007年)、副将小原新蔵、主務島国卿である。当時は高等部の柔道場を借用していたが取り壊されてしまい、練習場を求め、流浪の民に陥った。新道場建設には3年を要した。

65年5月29日、30日の第15回関西学生は準々決勝で同志社に0対2で敗れたが、5-

6位決定リーグ戦で3勝し、全日本出場を果たした。個人戦は中川達治が4回戦で抽選負け、田中勝吉は準決勝で一本負けしたが3位入賞を果たした。

66年11月20日、完成した新道場で、戦後の柔道部復活後間もなく始まった関大との定期戦、第15回「関関戦」が行われ、関学は1年の寺本久男、市村元昭、2年の古我一郎らの活躍により、15人中、3年全員の5人と2年1人を残して大勝した。これ以降しばらくの間「関関戦」は開催されていない。5月21日、関西学生個人戦で上野勝(新月会第8代会長)、谷清昭がベスト16となった。6月の全日本学生では予選リーグを危げなく勝ち進み、決勝トーナメントでも関大を破りベスト8に進出したが、優勝した中央大に敗退した。

67年、韓国・延世大柔道部が来日し、スポーツセンターに宿泊し、交流試合を行った。68年初めには関学が延世大に招待して貰う手はずになっていたが、日韓関係の突然の悪化によりビザが発行されず、実現しなかったのは残念であった。この年から88年まで、ミッション大会時に明治学院大との定期戦が開催されるようになった。

68年、関西大会は初戦の関大戦で1対2とまさかの不覚をとり、全日本のシード権を取れなかった。引き続き行われた1・2部入替え戦では1部リーグ残留と、全日本学生への出場権を確保した。この時を回想して市村は「府警での合同練習を通じ他校の実力もわかっており、自分としては、天理大には及ばないが、同志社、近大とは組み合わせしだい、他は勝てると思っていた。しかし結果は5位となり、その一日の長かったこと」と述懐している。

6月の全日本学生では決勝トーナメントに進出、1回戦の近大戦は先に2勝し、2対1で逃げ切って全関の借りを返した。準々決勝では中大と当たり、ここで全関以来不振を続けていたポイントゲッターの今中が次峰で相手の有力選手である後藤に見事な一本勝ち、1対1の内容差で準決勝に進んだ。準決勝の早大戦では、全員死力を尽くしたが、0対3で負け、東洋大とともに3位となった。

69年、第18回全日本学生では予選リーグを勝ち抜いてきた強敵日体大に勝利し、全員結束のもとにベスト8入りを果たした。

70年からスポーツ推薦による入学制度が廃止され、戦力低下により全日本への出場が困

難となった。78年には総合関関戦が復活。79年の第2回総合関関戦では2-3で敗れた。以後、96年に推薦入試制度が復活し、戦力が整うまで低迷することになる。95年から97年までは第7代部長として林紀昭先生に就任していただいた。97年4月に河鱒一彦先生(第8代部長、~2010年)が赴任して学生の指導に当たられ、99年ごろからようやく甲南大や関大と互角以上の戦いができるようになり、全日本学生柔道体重別団体や選手権に出場できるようになってきた。

2000年、関西大会代表決定戦で関大に6-0と勝利し、全日本学生に出場。01年、第17回寺島杯(1942年卒寺島秀雄先生の業績を記念し、報徳学園が主催)の大学の部で初優勝。関西大会でも23年ぶりのベスト8となった。02年、全日本ジュニア100kg級で1年の河合宏治が準優勝。全日本団体では久しぶりに1回戦を突破し、2日目に進むことができた。03年、関西学生体重別では66^{kg}級で赤坂亨が準優勝、73^{kg}級で山内修平が3位、100^{kg}級で河合がベスト8となり全日本に出場している。

04年には佐藤博信専任講師が着任、コーチとして指導され、05年、全日本ジュニア近畿予選で60^{kg}級飯島大貴が優勝、73^{kg}級小茂田堯が3位となった。奥野衛師範、前監督伊藤憲行、蘭徳美監督、赤坂亨コーチと指導体制が徐々に整いだした。06年は試合ルールで合意できなかったため、関関戦が中止された(13年復活)。ミッション大会個人戦で國中彰人が優勝した。

07年、創部100周年を記念してオーストラリア遠征が行われ、100周年記念誌を発刊、柔道部の心(自尊自律、文武両道、正々堂々)を制定するとともに、記念式典が関学会館で挙行された。全日本体重別団体で全国ベスト16となった。08年にはミッション大会で同志社に勝ち初優勝を果たした。

OB会である新月会も、80年にはミッション大会当番校となった学生を物心両面で支援し、84年に創部75周年記念を宝塚ホテルで、89年には創部80周年記念祝賀会を新阪急ホテルで開催し、「80周年記念誌」を編纂した。部史第1部「原田の森編」は米田満先生がご自分で当時のOBに取材された貴重な資料を提供して頂いたものであり、祝賀会で米田先生

に感謝状を贈呈し感謝の意を表した。以後記録の散逸を防ぎ、会員の結束と親睦を図るために「KG 柔道」を創刊、毎年発行している。

09年、全日本体重別団体で東洋大に3-2、東海大九州に3-2で勝ち、2度目の全国ベスト16となった。同年の全日本体重別では藤田武士が81^{kg}級でベスト8となった。12年の全日本体重別では塩野幸平が73^{kg}級でベスト8となった。近年は関西大会ベスト8、全日本学生は1回戦勝利が当たり前となってきたが、もう一段上のステージへ行くことが望まれる。

□柔道部 部史 編集担当者 中前秀夫

(S63 経済学部)